

『探究』の姿を引き出す道徳科におけるしかけ

～自己の生き方について考えを深めていこうとする姿をめざして～

湊本祐也・田中千映

学校提案をもとに、道徳科における発達の段階を視野に入れた『探究』の姿を設定し、その姿を引き出すために、しかけを講じた。3年生では、「カリキュラムの工夫」「ICT機器の活用」「評価活動の工夫」のしかけ、6年生では「自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定」「グループでの話し合い」「納得解の共有」「視点を設けた振り返り」のしかけを行った。実践を行う中で、3年生では「カリキュラムの工夫」「ICT機器の活用」「評価活動の工夫」、6年生では「自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定」「グループでの話し合い」「視点を設けた振り返り」が、『探究』の姿を引き出すために効果的なしかけとして明らかになった。また、6年生でしかけの一つとして行った「納得解の共有」は、今回の実践に特に必要性のないものであることが明らかとなった。

キーワード：カリキュラムの工夫、ICT機器の活用、評価活動の工夫、学習課題の設定
グループでの話し合い、納得解の共有、視点を設けた振り返り

1. 研究内容・方法

道徳科の授業において、授業実践（小学校3年生・小学校6年生）を行う。授業中の子どもの発言や振り返りの記述から、発達の段階を視野に入れた『探究』の姿を引き出すことができたかを分析する。

1. 1. 小学校3年生の実践

本実践は、第3学年の10月下旬から11月中旬にかけて行った。本学級の子どもたちは、学校生活における「みんな同じ」ということに対して集団としての価値を見出しながらも、個人のもつ気持ちや考え方が一人ひとり異なることに気づき始める発達の段階であると考えられた。様々な考え方もつ他者と、よりよい人間関係を築いていくための生き方を考え始める時期と換言することもできるだろう。本実践では「いじめ」の問題について、様々な立場の気持ちを想像し、多角的な視点でアプローチを行いながら、友達と考えを練り上げながら互いの考えを広め、そして深めていく学習を行っている。

道徳科の学びを発達の段階を視野に入れ、教師の子どもたちに期待する『探究』の姿を以下の2つに設定した。

- ①「いじめ」の問題に対して、これまでの自分の経験を振り返りながら考えたり、これから自分がめざしたい生き方と結び付けて考えたりする姿【主体・活用】
- ②いじめに関わる三者の気持ちを想像し、友達と意見を交流するなかで、同じ考え方や異なる考え方があることに気づき、自己の生き方についての考え方を深めていこうとする姿【協働・省察】

また、上記の姿をめざすために、3つの「しかけ」を講じた。

- ①「いじめ」の問題を取り上げた様々な教材文を活用し、単元を通して系統的に学びを深めていくカリキュラム設定【主体・活用】
- ②タブレットPCを活用し、自分や友達の意見を共有しながら、話し合いのためのツールとして活用できる環境【協働・活用】
- ③単元における学びの足跡を、「振り返り」として毎時間残し、系統性をもって考え方の変容や深まりを感じられるようにした。また「振り返り」の質にも着目し、道徳的心情や生き方に繋げて表現できるような評価活動【省察】

1. 2. 小学校6年生の実践

本実践は、第6学年の10月下旬から11月中旬にかけて行う。本学級の子どもたちは、道徳科の学習において、感じ方・考え方は多様であることや、自己のよりよい生き方を見つけることの価値を実感できる発達の段階にあると考えられた。そこで、発達の段階を視野に入れた『探究』の姿を以下の2つに設定した。

①学習課題に対して、自己の生き方と照らし合わせながら、自分事として、考え方や心のもち方、行動の仕方を考えようとしたり、自分の生活のどのような場面で生かせそうかを考えようとしたりする姿【主体・活用】

②感じ方や考え方を交流する中で、自分とは違う根拠や考え方があることを理解しようとしたり、自分のものの見方や当たり前だと思っていることを問い直そうとしたりする姿【協働・省察】

また、上記の姿をめざすために4つの「しかけ」を講じた。

①自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定【主体・活用】

自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定を行い、1時間の学びが自分の生活の何につながるのか見通しをもち学習することができるようにする。考えたことが自分の生活の何につながっているのかを意識しやすい環境をつくることで、今後の自己の生き方につなげていこうとする実践意欲や態度も養いやすいと考える。

②「中心発問」の場面でのグループでの話し合い【協働】

グループでの話し合いを適宜取り入れる。気持ちや理由などは言葉で表現しやすいが、「ねらい」にせまる「中心発問」の場面では、思いや考えをもつことができても、それを言葉で明確に表現することの難しさが考えられる。その際に、グループでの話し合いを取り入れることで、考えや言葉を補足し合うことができる。また少人数での話し合いは、友達と違った視点であっても意見を伝えやすく、多面的・多角的な考えを出しやすいと考える。さらに、子どもたちは関わり合うことや力を合わせることの価値を実感できると考える。

③学習課題について自分が見つけた答え（納得解）を全体に共有【省察・活用・協働】

毎時間の展開後段では、学習課題について自分が見つけた答え（納得解）をメンチメーターに打ち込む活動を行う。またそれを全体で共有する。友達が見つけた答え（納得解）と自分が見つけた答え（納得解）を照らし合わせながら再度学びを問い直すことができると考える。

④3つの視点（今日の学習で考えたこと・自分に振り返って・これからの生活に生かしたいこと）を与えた「振り返り」【活用】

「振り返り」を行う際には、3つの視点（①今日の学習で考えたこと②自分に振り返って③これからの生活に生かしたいこと）を与えて書かせる。特に②や③の視点を設けることは、「振り返り」を書く中で、これまでの自分の考え方や心のもち方、行動の仕方を問い直そうとする姿や自分の生活につなげて考えようとする姿を見ることができると考える。

2. 第3学年の実践及び考察

2. 1 「いじめ」について考え、伝え合い学び合う道徳の学習の実践

◎学級：3年A組

◎単元名 「いじめをなくすには…」

◎単元のねらい

「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場からそれぞれの気持ちを想像し いじめをなくすためにはどのようにすればよいか考えようとする態度を養う。

◎単元の計画

第一次 いじめについて、みんなで考えよう（道徳）	
第1時 「いじめの問題をとらえよう」（教材：イラスト）	・いじめの場面を捉えたイラストの中から、「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場の人物を見つけ、それぞれの気持ちを考える。A（善悪の判断）
第2時 「いじめを止めるために大切な気持ちを考えよう」（教材：「たからさがし」）	・教材文を読み、いじめを見ている立場から友達に「やっばり、やめよう」と言うときの気持ちを想像し、いじめを止めるために大切な気持ちを考え、交流する。A（善悪の判断）
第3時 「なかまを大切にすることを考えよう」（教材：「同じなかまだから」）【本時】	・教材文を読み、仲間から公平に扱ってもらえない悲しさや苦しさを理解することを通して、誰に対しても公平に接するために大切な気持ちを考える。B（公平、公正、社会正義）
第4時 「いじめをなくすために大切なことを、みんなで話し合おう」	・第1時から第3時までの学習で気が付いたことや考えたことをもとに、いじめを未然に防ぐ方法やいじめが起こったときに解決する方法について、みんなで話し合う。B（公平、公正、社会正義）
↓	
第二次 いじめをなくすために、3Aから発信しよう（総合的な学習の時間）	
第5時 「いじめのない附属小学校にするために、みんなに伝える方法を考えよう」	・今までの学習をもとに、ポスターや新聞、動画（CMや劇）などで学校全体に発信する方法をみんなで考える。
第6時 「いじめのない附属小学校にするために、みんなに伝えよう」	・「いじめのない附属小学校」のテーマとした成果物の作成をグループで行う。

2. 1. 1. 子どもたちの考えを「深め続ける」単元の学びをめざして

第1時では、「いじめ」の問題が散見される教室の様子を捉えたイラストを用いて、「いじめ」の問題に「気付く」ことをねらいとした学習を行っている。また本校で期間を設定し全校で取り組んでいる人権週間にも関連させ、「人権」という言葉を用いながら学習を進めた。「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の三者の立場から、それぞれの気持ちを想像し文章で書き表す個人思考の活動をはじめに行った。

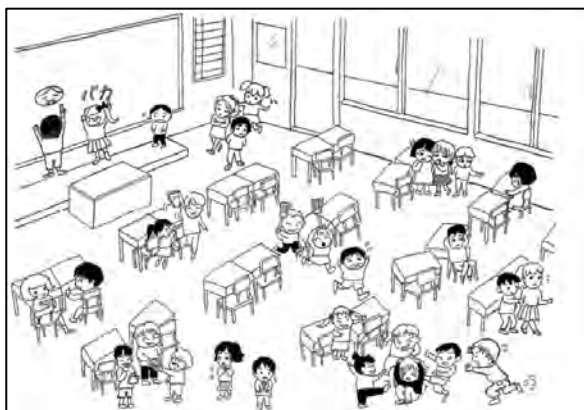


図1 第一時で使用したいじめの様子を捉えた資料

第2時と第3時では道徳の教科書にある教材文(「たからさがし」「同じなかまだから」)を活用し、第1時と同様に三者の立場から気持ちを考え、いじめの問題について話し合う活動を行った。



図2 タブレットを話し合いで活用する児童の様子

第4時では、本單元におけるこれまでの学習活動のまとめとして、「いじめをなくすために大切なこと」というテーマで、学級全体で話し合う活動を行った。いじめの問題が大きな社会問題になっていることにも触れながら、「どのようにすれば未然に防ぐことができるのか」「いじめが起こったとき、どのようにすれば早く解決できるのか」など、これまでの学習で出てきた言葉を用いながら、熱心に議論することができている。

第5時と第6時では、総合的な学習の時間(本校では「CHANGE」と呼んでいる)と繋げて、ポスターや動画などで発信する活動に繋げていく予定である(本稿執筆時はまだ計画中)。

2. 1. 2. 第3時「なかまを大切にすることを考えよう」の授業より

◎本時のねらい

仲間から公平に扱ってもらえない悲しさや苦しさについて考え、誰に対しても公平に接し、仲間を大切にしていこうとする態度を養う。

◎授業の展開

①めあてを確認する。

「なかまを大切にすること」についてみんなで話し合い、考えよう。

- ・前時までの学習のふりかえりも行う。
- ・「仲間」とは何か、みんなで意見を 出し合う。

②教材文「同じなかまだから」を読む。

- ・教師による朗読を行う。
- ・登場人物や場面の確認を行い、何が問題だったのか意見を出し合う。

③登場人物の気持ちを「心カード」に記入する。

- ・ロイロノートで記入する。
- 光夫…仲間外れにされる(黄)
ひろし…仲間外れにしようとする(緑)
とも子…様子を見ている(黄)

④「なかまを大切にすること」について話し合う。

- ・みんなで「心カード」を見せ合いながらグループ(3~4人)で話し合う。
- 【評価】それぞれの立場の気持ちを考え、「どの人も大切にすること」について考えることができる。

⑤振り返りをする。

- ・ロイロノートに振り返りを記入する。

本時では以下の3つのしかけを用いて、学習を進めた。

まず1つ目のしかけとして、系統性をもったカリキュラムで道徳科の学びを進めていることである。「いじめ」という問題について、単発(1時間扱い)の学習だけでは、ただ「いじめはよくない」という結論に至るだけの浅い学びにしかならないことが予想される。より考えを深め、そして子どもたちで広げていくためには系統的にカリキュラムを作り、実践していく必要があると考え単元計画を立て実践した。様々ないじめの場面を学習していくなかで、「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場の気持ちを「心カード」に蓄積していき、後の話し合い活動で活用できるようにする。このようなカリキュラムのしかけにより、子どもたちは個人でいじめ問題について深く思考し、自分らしく表現を行い、友達と積極的に意見交流する姿が見られた。

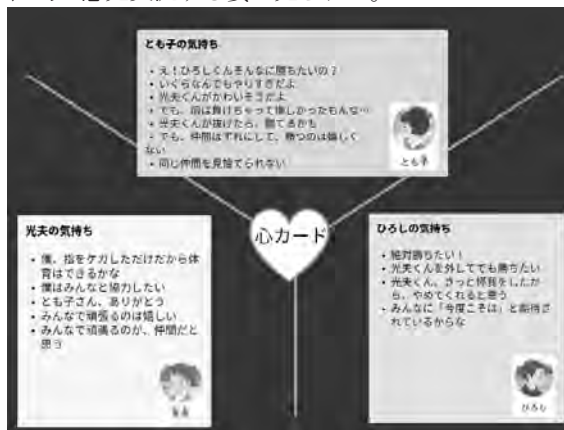


図3 シンキングツール (Yチャート) を活用したノート

第1時から第3時（本時）までは、全て「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場の気持ちを考える学習を繰り返した。このように同じ流れの学習を繰り返すことにより、個人の考えの変容を捉えやすく、それぞれの「いじめ」の問題を比較しながら考えることに役立った。個人の考えを学級全体で共有できるように掲示物も工夫した。



図4 学級の足跡を可視化する掲示物

2つ目のしかけは、ICT 機器の活用である。1人1台のタブレットPCを活用し、前述の「心カード」の作成や共有（ロイロノート）、ふりかえり活動などに役立てた。「いじめられる立場」「いじめる立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場をそれぞれ色別のカードで示し、シンキングツール（Y チャート）を使って自分の考えを分類して整理を行っている（例：「いじめられる立場（黄）」…「どうして私だけ仲間外れにされるんだろう」）。そして自分の考えを「提出箱」に入れ、友達と見せ合い交流する場面を作る。このような ICT 機器の活用は、たくさんの考えを出し合い、話し合いのなかで練り上げていく道徳の学習と親和性が高いことが考えられる。このように道徳科の学習に ICT 機器を効果的に活用していくことで、自分の考えを表現する幅が広がり、視覚的にも分かりやすく友達と意見を共有し、より深く広いいじめの問題について考える姿が見られると考えた。



図5 学級全員の考えを見合うロイロノートの活用

3つ目のしかけは評価活動の工夫である。本単元の学習において、道徳的価値について自覚を深める学習を実現していくためには、「いじめはよくない」（行動）、「かわいそうだと思う」（心情）で止まることなく、さらにその中核にある「道徳的な考え方」「生き方」についてアプローチしていくことが不可欠である。上記の2つのしかけを本単元の学習に盛り込みながら、教師からの評価（子どもの発言に対するフィードバック、振り返りの評価）も、道徳的価値について自覚を深める学習を意識し行った。とくに教師からの「問い返し」の場面は重要であると考え、机間指導をとおして細やかな指導を心がけた。「どういうところがかわいそうだと思いますか？」「もし自分だったら、どうしたい？」など個別に問いかけ、「自分事」としていじめの問題に向き合うような支援も行い、一緒に考える時間を大切にしました。



図6 「問い返し」を行う教師の児童への関わり

【児童の振り返り（ロイロノート・第3時）】

ふりかえり

嫌いな人や自分が苦手な人でもどれだけ嫌でも無視をしたり仲間外れにしたりすることはどれだけ嫌いだろうがしてはいけないと思った。

ふりかえり

を大切にしないといけないとおもいました。人の悪口、嫌な言葉を言うとみんなが傷ついて仲間はずれにされてしまうそれだとその人はかわいそうだとおもいました。なぜならみんなはチームワーク、助け合いがいいとおもいました。仲間はずれにされた子はその子と仲良くなりたいたい気持ちになる。仲間と言うのは友達、家族チームワークだとおもいます。みんなは仲良くなれないといけないから私も仲良くしたいです。

ふりかえり

仲間は大切なものだから裏切ったり、仲間外れにしたりすると仲間が嫌な気持ちになったりするからこれからも仲間を大切にしたいと思った。仲間は全員の心をつなぐといい仲間になれるんだと思った。

2. 2. 授業の考察 3学年

本実践で設定した子どもの姿を、講じた「しかけ」により引き出すことができていたかを、児童の発言や振り返りの記述等をもとに考察する。

2. 2. 1. 『探究』の姿①について

①「いじめ」の問題に対して、これまでの自分の経験を振り返りながら考えたり、これから自分がめざしたい生き方と結び付けて考えたりする姿
【主体・活用】

小学校3学年の発達段階では、まだまだ抽象的思考が未発達なところも多く、「いじめ」の問題を自分事として捉え、どのようにして問題と向き合い自己の生き方を決定していくのかを言葉で表現するのは難しい。しかし子どものなかには、次のような具体的な行動を考えているものや、「いじめ」によって何が失われてしまうのか、どのようなことに繋がるのかなどを記述できている子どももいた。

ふりかえり
(いじめと人権について考えたこと)

もしやられている子を見つけたら、勇気を出して助けてあげたいです。自分がやられてしまったら、助けを呼びます。いじめは、人の人権を奪うもので、とても私にとってはいけないものだと思います。いじめのせいで、ある人の命が空に消えてしまったり、やりたいことをやりたくない、やりたい夢を失ってしまったりしてしまうものです。とても悲しいです。

授業中の発言でも、上記のような「いじめは悲しい」「いじめはよくない」からもう一步踏み込んだ意見が多く見られ、真剣に話し合う姿が多く見られた。第3時では、扱った教材文が体育の学習に関わるものであったため、自分の体育の学習の経験を交えながら振り返る子どももいた。

ふりかえり

- 昨日のザースボールではビブスチームが負けてしまったけどみんなやりきって、みんなたのしかったと思う
- 3Aにも運動が苦手な子もいたと思うから仲間はズレにしたらダメだと改めて思った

ふりかえり

仲間の気持ちを考えて言葉をつかうことはとても大事なことだなあとこの授業で思いました
何が苦手なチームに嫌味を言われるのはチームの仲間だからその子の苦手な事もしようがないということチームで分かり合えばもっと楽しく体育が出来るんじゃないかなとこの授業で思いました。

これらの子どもの振り返りや授業内での発言から、「いじめ」の問題に対して真摯に探究する子どもたちの姿が見られることができたと考えられる。

2. 2. 2. 『探究』の姿②について

②いじめに関わる三者の気持ちを想像し、友達と意見を交流するなかで、同じ考え方や異なる考え方があることに気づき、自己の生き方についての考え方を深めていこうとする姿【協働・省察】

例えば、同じ「悲しい」という気持ちの中にも、子どもたちの受け取り方は様々である。第3時の「同じなかまだから」では、運動の苦手な光夫の気持ちも「仲間外れにされて嫌だ」という意見もあれば、「ぼく、体育できるのになあ」といった自分がされていることに対して気に留めていない意見もあり、議論が白熱したグループもあった。互いの意見を尊重しながら、個人思考の時間にまとめた自分の意見を伝え、グループのホワイトボードにまとめていくことで学び合う姿が多く見られる道徳の学習になったと考えられる。



図7 考えを持ち寄って、話し合いを進めるグループ活動の様子

本実践では「いじめ」に関わる「いじめられる立場」「いじめている立場」「いじめを見ている立場」の3つの立場からそれぞれの気持ちを考える活動を行ってきた。しかし、いじめには4つ目の立場である「調停者」の存在があることも、より深く学習を進めるための要素として考えていかなければならないだろう。

本単元の第3時で学習した教材文「同じなかまだから」では、登場人物の「とも子」が調停者の役を担い、勇気を出して弱い立場の子を守る発言をする場面をする様子が描写されている。小学校3年生の発達段階を考慮し、とも子の立場を「いじめを見ている立場」でまとめたが、やはり子どもたちの話し合いの中心となったのは調停者である「とも子」の気持ちや行動であった。「わたしもいじめを止めるために勇気を出して行動したい」というとも子の行動に感化された意見が多かったが、なかには自分にはそんな勇気が無いといった意見や、いじめる立場からの報復を恐れる意見など、子どもたちの素直で様々な意見が話し合う姿が見られた。「いじめ」の問題をテーマにし、友達と活発に意見交流をして自己の生き方についての考え方を深めていこうとする姿が十分に見られる実践となった。

3. 第6学年の実践及び考察

3. 1. 授業の実際

3. 1. 1. 単元について

◎単元名 『絆』～共によりよく生きるために～

◎単元のねらい

よりよい人間関係を築いていくためには、どのような心のもち方や考え方、行動をしていく必要があるか考え、仲間と共に「絆」をよりよく深めていこうとする心情を育てる。

◎単元設定の理由

この時期の子どもたちは、ものの見方や考え方についての認識が深まることから、相手のものの見方、考え方との違いをそれまで以上に意識するようになる。また友達を意識し、仲のよい友達との信頼関係を深めていこうとする一方、閉鎖的な仲間集団を作る傾向も生まれ、友達との関わりに躊躇してしまう状況が見られるようになってくる。これらのことから、相互の信頼の下に、協力して学び合うことができるような人間関係を築いていくことが必要であり、「そのためにはどのような考え方や心のもち方、行動をしていく必要があるのだろうか」を考えていくことが大事であると考えた。

◎単元の計画

<p>道徳科 (全5時間)</p> <p>第一次 学級目標の「絆」を深めるためにはどうしたらいいのだろう。 ・「絆」が深まるとは、どんな姿?</p> <p>第二次 「絆」～共によりよく生きるために～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1時 「25人でつないだ金メダル」 (Cよりよい学校生活、集団生活の充実) ・第2時 「人間を作る道 一剣道一」 (B礼儀) ・第3時 「エルトゥール号—日本とトルコのつながり—」 (C国際理解、国際親善) <p>第三次 「絆」を深めるためにどんな考え方や行動していきいのだろう。</p> <p>※ 国語「伝えにくいことを伝える」 体育「ソフトバレーボール」 チェンジ「1年生プロジェクト」などと関連させて単元を組む。</p>
--

3. 1. 2. 自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定

第一次では、学級目標である「絆」について、一人一人がイメージしている「絆」の共有を行い、現在の「絆」の達成度を一人一人が「〇%」で表した。

以下は、子ども達がイメージしている「絆」をまとめたものと、「絆」の達成度を表したものである。

◇「絆」とは

- ・互いに気づき合える・みんなが力を合わせて協力する
- ・信頼し合える ・分かり合える ・砕けない友情
- ・深い友情

◇どのくらい達成できていると思うか

15%	25%	30%	35%	40%	45%	50%	55%	60%	65%
1人	1人	3人	1人	7人	5人	5人	1人	1人	2人

子どもたちは、自分たちの達成度から、今後「絆」を深めるために考えていくことの必要性を感じていた。そこで、「共によりよく生きる～『絆』を深めるために～どのような心のもち方が大切なのだろう」を学習課題として設定し、自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定につなげることができた。

第二次では、「共によりよく生きる～『絆』を深めるために～どのような心のもち方が大切なのだろう」を学習課題として、学習課題に関わる内容項目の教材で複数時間授業を行った。(3. 1. 1. 単元の計画参照)

3. 1. 3. 視点を設けた「振り返り」

第二次では、授業の終末に1時間の学びを振り返り、ワークシートに記述を行った。その際には、3つの視点(①今日の学習で考えたこと・②自分に振り返って・③これからの生活に生かしたいこと)を与えたワークシートを用いて書かせるようにした。特に②や③の視点を設けることで、これまでの自分の考え方や心のもち方、行動の仕方を問い直そうとしたり、自分の生活につなげて考えようとしたりする姿を引き出すことが期待できると考えた。

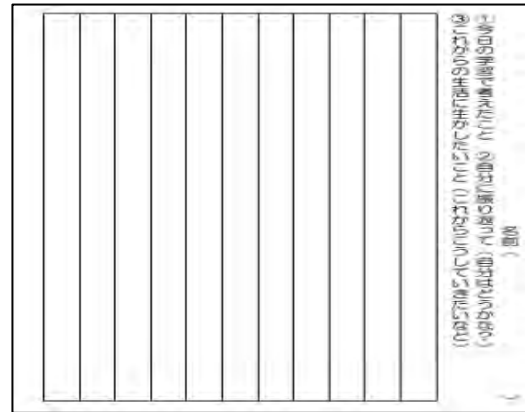


図8 「振り返り」のワークシート

第2次 第1時の振り返り

今日の授業で絆を深めるためには西方さんのようにどんなに複雑でもあきらめずに協力すれば、仲間の思いは上げられることを知りました。テストジャンパーと選手が力を合わせて金メダルをとれたのは本当にほこりあることだと思います。体育のバレーボールでチームで試合をするときや話し合う時、目標に向かってがんばる時ここで学んだことを活かそうと思います。

第2次 第2時の振り返り

今日は絆を深めるために大切な心を考えました。私は相手を思いやる心が大切だと思って、理由は相手を思いやる心が絆や言葉（いい言葉）につながると思ったからです。これからは相手のことを考えたり、思いやっています。

今日の学習で持つべき心はいつでも周りを見て相手のように気持ちを伝えるか考える心が大切だと思いました。自分は試合で悔しく負けた時などたまに適当になっただけで済ませていたので、今日気付いたことを生かしていきたい。これからも意識することで、とても変われると思うので、もっと続けていきたいです。

第2次 第3時の振り返り

今日は絆を深めるためにはお互いに感謝し合っていることが大事だと分かりました。そして助けてもらった感謝の気持ちを助ける側に伝えることで、どんどん絆が深くなっていくことも分かりました。だから、今度からはただ言葉でありがとうと伝えるだけでなく、相手を助けたり、相手の喜んでもらえる形で伝えようと思いました。も一つ思ったのは、もらった恩を返すことはできるけど、はじめに助けるのは難しいということです。だから初めに知らない外国人を助けた大島の人はずいぶんと思いました。

トルコと日本は、お互いに助け合って支えていると思います。そういうのって、勇気があると思うので、すごいと思いました。助けられたことは何回もあっても、自分がまたその子を助けたことはあまりないと思いました。一回助けただけでも相手のことを信じ、また助けあって、絆が深まっていくと思います。絆を深めると互いに協力し合ったらできるので、助け合いの心をこれからも大事にしたいです。

3. 1. 4. グループでの話し合い

第2次では、中心発問の場面でグループでの話し合いを取り入れた。子ども達は考えや思いをもっている、自信がないと、積極的に挙手して考えを伝えにくい様子が見られる。気持ちや理由などは言葉で表現しやすいが、「ねらい」に迫る「中心発問」の場面では思いや考えをもつことができても、それらを言葉で明確に表現することの難しさがあると考えた。そのため、せっかく思いや考えも自分の中だけにとどめてしまう可能性がある。しかし、グループでの話し合いとなれば、少人数のため、友達と違った視点であっても意見を伝えやすく、互いに考えや言葉を補足し合うことができる。そのため、より多面的・多角的な考えに触れることができ、自分とは違う根拠や考え方を理解しようとする姿や問い直しをしようとする姿が期待できると考えた。

第3時「エルトゥールル号—日本とトルコのつながり—」

◎本時のねらい

大島の人々やトルコの人々の思い、両国の絆をつなぐ

ものを考えることをとおして、どの国の人々も同じ人間として尊重し、相手の身になって人の心を思いやり、共によりよく生きていこうと努めようとする心情を育てる。

◎授業の展開

1. 学習課題を確認する。
2. 教材「エルトゥールル号—日本とトルコのつながり—」を読んで話し合う。
○トルコの人たちを助けた大島の人たちの思い
○日本人を優先して飛行機を出してくれたトルコの人たちの思い
- ◎どんな心が日本とトルコの「絆」をつないでいるのか（◎は中心発問）
3. 「絆」を深めるために大事にしていきたい心のもち方を考える。
4. 学習を振り返る。（ワークシートに記入）

グループでの話し合いは、上記の授業の展開の太字のところ取り入れた。



図9 グループでの話し合い

また、グループで話し合った後は、以下のような発言が見られた。

教師：これまでの話を思い出して、どんな心が日本とトルコの絆をつないでいるかグループで話してみてください。

<グループでの話し合い>

1班：個人じゃなくて、国全体で助けてもらったら助けるっていう国同士助け合い。

(C：少し拍手) (C：どっちも優しい優しい)

2班：やってもらったから、今度はお返しにっていうことが続いている。

教師：どんな心？

2班：やってもらったことにお返しをしなければいけないという心。

3班：似ているんだけど助けてもらったら、お礼、やってもらったことを忘れない。

4班 (C15)：トルコで大地震がおこった時に日本が助けて、日本で地震がおこった時にトルコが助けて、またトルコで大地震がおこった時に日本が助けて、どっちも優しい心になって思った。

5班：通じ合う心が大切。日本はトルコの人たちのことを大丈夫って信じて助けているし、トルコも日本のことを大丈夫やっと思って助けているから、相手のことを信じてっていう心が絆をつないでいるのじゃないかなと思いました。

教師：信じて通じ合うって言ってたけれど、どこで信じているの？

(C：助けてもらった・・・)

ひろ：助けてもらったら優しいんやなって思っている。

<単元をとおした振り返り>

1人じゃないという気持ちをもって生活していると、自分だけのためじゃない時のことをイメージすると何でもチャレンジできた。そして、一人の人間として礼儀を正しく接することが大切。自分もし逆の立場だったら・・・と考えながら言葉を発すると相手の気持ちがわかったり、その人にとっては・・・ということを考えて友達とはなすと、より相手に近づけると思った。自分の今までの生き方を振り返ると、こんなことイメージすらしていなかったと思った。だからこそ、これからは、この学習で学んだことを生かせるように全力を使いたい。

上記の振り返りの下線部からは、単元のねらいである「よりよい人間関係を深めていくためにはどうすればよいか」について、複数の教材から学んだ道徳的価値を自分の生活と関係づけながら考えることができた様子がうかがえる。

3. 2. 2. 『探究』の姿②を引き出すことができたかどうか

②感じ方や考え方を交流する中で、自分とは違う根拠や考え方があることを理解しようとしていたり、自分のものの見方や当たり前だと思っていることを問い直そうとしていたりする姿【協働・省察】

『探究』の姿②をめざすために講じた「しかけ」は、「グループでの話し合い」と「学習課題について自分が見つけた答え（納得解）を全体に共有」である。

これらのしかけが、『探究』の姿②を引き出すために効果的であったかを、3. 1. 4.のグループでの話し合い後の授業記録と、3. 1. 5.メンチメーターを使って、学習課題について自分が見つけた答え（納得解）を全体に共有の様子から考察したい。

トルコと日本の絆が続いていることについては、グループの話し合い後、「お返しをする」「助け合う」「優しさ」「相手を信じる」「相手と通じ合う」「礼儀・思いを言葉に表す」「相手を思う」「勇気」と複数の道徳的価値に関わる意見が出された。これは、少人数という場であったため、友達と違った視点であっても意見を伝えやすく、多面的・多角的な考えを出すことができたのだと考える。また、4班で発表したC15は自信があれば積極的に発言することができるが、自信がないと短い言葉や「わかりません」と伝えることが多い。C15が班の代表として発表できたのは、グループの話し合いの中で、C15の意見を友達が理解し、共感してくれたことで、代表として伝えようとする姿が見られたのではないかと考える。

多くの班で、「相手を信じる」「お返しをする」などと発表しているが、7班の発表を受け、教師が「他にもなぜ助け合えたのだろうか」を再度問い返すことで、子どもたちから発表された日本とトルコの「絆」をつな

ぐ心を整理したいと考えた。教師の問い返しに対して、C27は「優しいから」と発言し、他の児童も「優しさ」とつぶやく様子が見られた。「優しさ」だけに話が収まってしまうかと思ったところ、C18が「勇気」と発言した。C18のグループでは、グループの話し合いで、人間の弱さの部分を素直に出し合う様子が見られていた。グループでの話し合いができたからこそ、C18の「勇気」が出てきたと考える。また、人間の弱さの部分については少人数での話し合いだからこそ、出し合うことができたのではないかと考えている。

またメンチメーターを使って、学習課題について自分が見つけた答え（納得解）を全体に共有した「しかけ」については、半数以上の子もたちがすぐに「振り返り」を書き始めた様子から、「今日の学習から考えた心のもち方を友達の心のもち方と比べて問い直す」という姿を引き出すにあたり、大きな効果はなかったと考える。教材を使ってグループや学級全体で考えを交流する中で、自分のものの見方や当たり前だと思っていたことを問い直し、自分の答え（納得解）を見つけていたため必要性を感じなかったのではないかと考えている。

メンチメーターへの記入を行わず、全体での話し合いに時間をかけることで、より深い問い直しが期待できたかもしれないと考える。

4. 成果と課題

第3学年の実践では、「カリキュラムの工夫」「ICT機器の活用」「評価活動の工夫」といったしかけにより、引き出したい『探究』の姿に繋がる一定の成果が見られた。令和3年度におけるいじめの認知件数は615351件と過去最高となっており、学校現場においていじめ問題に対応していくことは喫緊の課題となっている。小学校3年生という小学校中学年の発達段階においては、相手の立場になって考えたり、トラブルを予見して行動を考えたりすることなどが未熟なところもあり、道徳科で人とのより良いコミュニケーションを考える機会を担うところは大きい。また友達と意見を交流させながら、いろいろな価値観について知り、互いに言葉を交わすことも大切であると考えられる。

上記の道徳科の学びを実現するためには、週に1時間の道徳の時間を、子どもたちも教師も大切な学びの場と意識することが欠かせない。本実践では、子どもたちが自分なりに道徳科を学ぶことの意味を見出し、自己の生き方に繋げていくような姿を引き出せるようにカリキュラムの工夫やICTの活用、評価の工夫などに取り組んできた。今後もさらに道徳科の学習が有意義なものになるように教材や指導法について研究を重ね、実践していきたい。

第6学年の実践では、「自分たちの生活に関わる単元をとおした学習課題の設定」「振り返りの視点」「グループでの話し合い」のしかけは、引き出したい『探究』の姿に一定の効果が見られた。しかし、より自分

事になるためには、道徳科と関連させた他教科・他領域（今回は特にCHANGE「1年生プロジェクト」）で学習課題に関わる共通の体験を十分させておくことの必要性も考えさせられる。今後は、日々の道徳教育を深める役割のある道徳科の授業においては、子どもたちが共通の土台の元で話し合いができるように、他教科・他領域との関連も重視していくことでさらなる学びの深まりが期待できると考える。

また、「学びを振り返る」にあたっては、友達の考えから学んだことや、最初に考えていたことと比べるということを取り入れることで、友達と協働して学ぶよさについてもより実感することができるのではないかと考える。

本校道徳部では、「自己の生き方について考えを深めていこうとする姿を目指して」を副題に設定し、研究を進めてきた。今回3年生及び6年生で実践した様々な「しかけ」は、子どもたちの道徳科の学びに寄与するものが多く見られた。

その中でも、特に道徳科の学びが自分の生活とどう結びつか見通しをもてたときに、子どもたちは自己の生き方と結び付けて考えようとしたり、他者の考えと比較して自分の考えを問い直したりする子どもの姿が見られる。今後も子どもたちにとって、週に1時間の道徳の学習が自分との関わりで考えられるような時間になるように、更なるしかけを考え実践・研究を重ねていきたい。

参考文献

- 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」廣済堂あかつき株式会社
- 田沼茂紀(2020)「問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり 学びのストーリーで「自分ごと」の道徳学びを生み出す」東洋館出版社
- 浅見哲也(2020)「こだわりの授業レシピ～あなたはどんな授業がお好みですか?～」東洋館出版社